

天司の落としもの

虹野衣司

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初めまして。

ハーメルンで投稿することにしました。

多くの方に見ていただけると嬉しいです。

天司の落し物は、短編集になる予定です。

随時更新していきますので、よろしくお願いします。

コメント欄に好きなキャラを描いてくだされば、そのキャラメインのお話を書きますので、ぜひ〜！

目次

天司の落しもの	1
第三のアイギス	4
かっこいい名前が欲しい	7
デュレーション・グラン	11
空の世界の愛の物語①	14
星の獣の奏者ジータ 前編	16
星の獣の奏者ジータ 後編	19
ぐらんフレンズくみなみさんにお任せなのだく 前編	23
ぐらんフレンズくみなみさんにお任せなのだく 後編	26

天司の落としもの

「うげえ！どうしてこうなるんだよう」

「これもまた運命さ」

「でもよう、あんまりだぜ…」

「運命なんて、俺が変えてやる」

「ふふふ、キミならそう言ってくれると思っていたよ」

「ああ。必ず。次は必ず…」

拳を空高く突き出すグラン。

それを意味ありげな瞳で見守るアルルメイヤと、頼もしく思うビィであった。

時は5分前に遡る。

グラン一行は、たまたまガブリエルのマルチバトルに参戦した。

Rank150をゆうに超える不穏な名前な人が多い中、グランたちは懸命にトレハンをかけ、グラゼロを打っていた。

「召喚：闇の炎の子。汝の名は、カグヤ！」

「つておい、そっちかよ！全然ちげーじゃねーか！」

「封印されし、邪眼の力…」

「お前のおかげでグラゼロワンパンマンって呼ばれなくて助かってるぜー」

「つておい！ワンパンもツーパンもかわんねーよ！」※1

「ぶつつぶす！」

「おいおい、物騒だぜ…オイラに向かって言うなよ…」

「へ？」

「ビィ、静かにしてくれ。俺たちは真剣な戦いの最中にいるんだ」

「おいおい、オイラがわりいのか？」

「私の銃弾からは逃れられないよ」

「うげえ！十天衆2人もいるのかよ！つていうか、なんでだよ！オイラはわるくねー！」

戦闘中にもかかわらず、あまり緊張感のないくぎゆうである。

「十天衆に狙われて、緊張感ないわけないだろ！オイラ、あきれて何も言えないぜ」

メイン風オリバー義賊エクストラアビリティーオールトレハンダラン、ルナール、サラールサ、エッセルというパーティーで参戦していた。

メイン石は申し訳程度にグランデ3凸を、フレ石は前述のカグヤを連れてきていた。

マルチでのガブリエルとの戦いは初めてのグラン。苦戦を強いられていた。

「そりやそうだよなー。このパーティーだし。せめて土パで来いよな。それにしてもグランの紹介ってこんな大変なのか？オイラ、今後やっていける気がしねーぜ」

「勝利を信じて！」

「もう戦闘終わったのかよー！」

そんなこんなで戦闘が終わり、ドロップを確認したところで冒頭のシーンへと戻る。

そう。ドロップが残念なことになっていたのである。

「おいおい、そもそもアルルメイヤ連れてってないじゃねーか…」

「ああ愛おしい声だビィ君！（ザリザリザリ）」

「姐さんに至ってはどこから現れたんだか…」

「次は必ず、ガブリエルのアニメを出して見せる！」

「へへへ、さっすがオイラの相棒だぜ！」

「しかし、天司の落しものが『魔導士の信念』とはねえ」

アルルメイヤが不思議そうに呟いた。

どかーん。ずどどどど。

その声は大きな音にかき消される。

「みなさーん！大変です！船に魔物が現れました！」

「くそう！次の投稿は魔物を倒してからだぜ！」

はい、フィックス。

※1

神石以上のマルチで風義賊グラゼロワンパンはやめましょう。

なぜアテナに風パで来るのでしょうか。グラブル衰退のきっかけになります。やめましょう、まじで。

第三のアイギス

「チョイサー他心!」

「一応分らない家臣のために解説しておくが、チョイサーとはチヨークとチェイサーのことだ。どちらもウォーロックジータのリミットアビリティだ。他心陣は言うまでもないな」

「エーテルブラスト!」

「魔法少女がえげつない全体攻撃とは:俺も負けていられないな。消し炭にしてやろう」

「くふふふ!おぬしらは仲が良くて楽しそうじゃのう!」

「アニラか。お前はなぜバハ短剣のこのPTにいる?」

「プレイヤーがかわいいから、のような適当な理由で入れてるとかそんなところじゃろう。やれやれ。細かいことは後じゃ!今は目の前の敵を――」

「終わっている、だと?」

「なあなあ!うちの紹介せえへんうちに終わるの、やめてくれへん?」

週末は輝きを集めるのに必死になる。普段からすっかりマルチバトルに入っていればいいものを、このジータは毎週毎週、学習しない。特にこの1週間は、

「さあフェンリルを周回してフィンブル3セット作るわよ!」

などとほざき、土パを酷使しているだけだった。

「あの:ジータさん。こちら今週の輝きなんですけど:」

輝きの管理を任されているのは、団で最もしっかりしているだろうという理由でサラ(9歳)だった。フェンリル討伐戦で忙しい中、頑張って作ったであろうサラから提出された書類を見て、ジータは慌てて火パを招集した。

「いいかしら。あなたたちの使命はあと2時間以内に栄誉の輝きを500、集めて来る事よ!私もウォーロックで行くから、いつも通りお願いね」

というわけで、ひたすらティアマトHLを討伐することになったの

だが。

「ああもう、なんでよ！どのティアマトHも弱すぎるのよ！」

「くっ。俺としたことが。家臣の期待に応えられないとは」

「かたじけないのう…。アビリティを減らすかのう…」

「気にしても仕方あらへん！今はぎょうさん倒すことが大事や！ほな、次行こかー」

1人の陽気なエルーンを除き、意気消沈していた。そう。栄誉の輝きの上限を稼ぐ前にティアマトHが討伐されてしまうのである。

「間違いないわ。同じようにマルチに入ってくる人が多すぎるのよ！」

「ええやん、気にせず次やで、次！」

「BP使いすぎるとレ・フィーエに怒られるのよねー」

「ええって。団長がやることやもん、間違つてあらへんって！」

「そ、そうかしら…：そうよね。気にしても仕方ないわ。オツケを交換するためなもの。みんな、次も全力で行くわよ！」

そんなときに限つて、フレンド欄はコロマグかアテナ4凸で埋まっているものである。

「うそでしょ、なんなのよ！どうしてフラム4凸が並んでいるのよ！シヴァを置きなさい！」

「おいジータ。時間がないぞ。急いで選べ」

「はいはい、炎帝さん、仕方ないからアテナ4凸で行くわよ！」

こうして勝負は始まった。

「幸いにして人数もまだ少ないし、相手のHPも70%残っているわ。一気に行きましょう」

「消し炭にしてやる」

「我に任せよ！」

「おしおきや！」

各々、アビリティを放つ。その時、ジータの目が光った。

「ここよ！来たわ！」

合体召喚の欄にシヴァの姿がうつる。

「アビリテイレールなんて吹き飛びなさい！間に合え、アテナ召喚!!」
歴戦のジータは一瞬のシヴァを見逃さない。

「来たあああああ」

発動、第三のアイギス。

「さあみんな、1ターンで決めるわよ！通常攻撃！」

「おいジータ。何をしている。チエイサーを押し忘れてるぞ」
「え？」

時すでに遅し。弘法にも筆の誤りとは、まさにこのこと。

「いやあああああああ!!!」

貢献度、3万。果たして間に合うのだろうか…。

「ジータさん。すっかり栄誉の輝きを集めて来るのは立派だけれど、
少しBPを使いすぎですわ」

「はい、反省しております」

「先週も先々週も同じ言葉を言ってますのよ？覚えてらっしゃる？」

「はい、返す言葉もございません」

「いいこと？今後一切APやBPの無駄遣いを禁止します。もっと効
率よく、選んでバトルをしてくださいな」

「以後、気を付けます」

レ・フィーエにいくら怒られようともジータ団長はめげない。しよ
げない。泣いちゃだめだ。いけいけ、ジータちゃん！ジータちゃんの
空と紡ぐ物語は始まったばかりだ！

第三のアイギス 完

かっこいい名前が欲しい

「かっこいい名前が欲しい」

グランが私にそう相談してきたのは、暑い夏の日の、静かな夜だった。夕食を終え、自室で読書をしていると、ノックがあった。

「グラン。どうかしたのかな」

「え、部屋に入る前から分かるの？」

「ふふ、私はフータ・グランデ随一の占い師だよ。これくらいの未来が分からなくてどうする？」

「さすがアルルさん！じゃあ話が早いや、相談があるんだ」

「まずは部屋にお入り。ココアをいれてあげよう」

「子どもじゃないんだけど」

「私もココアを飲みたい気分なんだ、付き合っておくれ」

「はい」

「いい返事だ。まるで子どもみたい」

「アルルさんのいじわる：今日はよしておこうかな」

「ふふふ、すまない、そうはいつでも君が相談する未来は視えているからね」

扉越しにこのような会話をするのも、悪くない。

「さ、早くお入り。あまり立ち話はするものでもないよ」

「むー！」

頬を膨らませつつ入ってくるグラン。なかなかどうして愉快じゃないか。

「大人が子どもをからかうのは良くないと思います！」

「おや？自分で子どもと認めているのかい？」

「…ふんっ！」

「それで、相談というのは？」

「知ってるんですよ」

「いいや。未来のすべてを知っているはずじゃないだろう。相談に来ることは知っていても、相談の内容は知らないのだよ」

「じゃあ今視ればいい」

「まあまあ、そんなに拗ねてないで話してごらん。一緒に解決しようじゃないか」

「ずるい…」

何がずるいものか。こんな風に私の心を動かす君の方がずっとずるいというのに。

「その…実は…」

おや？照れるグランなど本当に珍しい。明日は雪でも降るのだろうか。明日の天気くらい、視てみるのもいいかもしれない。

「かっこいい名前が欲しい」

「…ふーん」

「え、アルルさん？もうちょっと何かないの？」

「グラン。君の名前は十分にかっこいい。たとえグランブルーだからなどという適当な理由からつけられた名前だとしても、ファンタジーから取られたジータよりはましさ。自信を持つんだ」

「そういうことじゃない！あとさりげなく*dis*られた！」

「おや？そうではないのか」

「ぼ、僕は…騎空団の団長だ。他の団といえば、例えば…白竜騎士団やリュミエール聖騎士団のようなかっこいい名前があるだろう」

「ふむ。確かに」

「でも、僕たちの騎空団には名前がないんだ」

「いわれるまで気付かなかったよ…そうだね。よろず屋さんからも『みなさくん』としか呼ばれないし、七曜の騎士からは『彼の息子の団』くらいにしか呼ばれていないし…」

「そうなんだ。だからかっこいい名前が欲しい！」

「アストロ・ホライズン」

「かっこいい…！けど、アメイジングなことになりそうだから嫌だ」

「ファンタズ・マゴリアCT7」

「かりおっさんだね完全に。修正おめでとう、いや木村さん福原さんありがとう」

「ネブカドネザル・セス」

「絶対強いと思うけど…」

「疾風のサバンナクロー」

「うみやみやみやみや！」

「キノヴオリ」

「食べないでくださいー！いえ、食べるなら僕を…」

「グラン、真面目に決める気はあるのかい？」

「ねえそれあんたが言う!?!」

「ココアを飲み、一呼吸置く。」

「私からしてみれば、グランが決めたものであればなんでもいいのだけれど」

「そんな無責任な。なんかいい名前、占ってよ！」

「それこそ無責任、というものさ。君が決めた名前なら、どんな名前であつても団員は受け入れるだろう。それに、画数や文字数から風水などで占うことはできても…君なら、グランなら、どんな運勢もいいものに変えてしまうと、信じているよ」

「ずいぶん信じられてるんですねー、うーん。まずは考えてみるよ」

「それがいいさ。ふふふ、今からどんな名前になるか楽しみだね」

「ありがと、アルルさん。ちよつと自信が出てきたよ」

「それは良かった。もう戻ってしまふのかい？」

「あー。うん。これからちよつとランスロットさんと稽古するんだ」

「そうか。では…気を付けて行つてくるんだよ」

「うん！」

「いつてらっ…」

「アルルさんも来る？いろんな人から見てもらった方が、練習になると思うんだ」

「グランはいつも無意識だから困る。少しは私の心境というのを考えてほしいものだ。」

「いや、やはり15歳と29歳では少々無理があるか」

「え、アルルさん、なにか言った？」

「っ！いや、なんでもないんだ。せっかくだから見てみよう。ランスロット殿の太刀筋は美しいからな」

「へーランスロット目当てなんだ、ふーん」

そう言ってさっさと行っってしまうグラン。

「あ、わ、おいていかないでくれよ」

「先に着替えて準備しないと。甲板で待ってて！」

全くグランは。グランがいなくなり、一人残された部屋でため息をついた。

それでも私は甲板に向かって歩いていく。

「年は取りたくないものだ」

まるで三十路のようなことを呟きながら、甲板にたどり着くと、綺麗な月と…。

いつも通り、次回の投稿は魔物を倒してからさ。

「ヴァイス・フリーユージェル！」

「うおお！かっこいいゼランちゃん！」

デュレーション・グラン

「ぼっこぼこにしてやるわん！」

「…つておっしゃってますけどソーンさんお願いできますか？」

「私は天性の狩人——この一撃は外さない！」

びりびり。

やはり誰が何と言おうと、こうなるのである。

九界琴を装備したグランとソーン。まだ最終解放前ながら、十分な力を発揮していた。否、十分、などという言葉で形容すべきではないかもしれない。このPTは、ケルベロスのManiacやHellに、いまだ1度も攻撃をされていないのだから。

もちろん、Heelではソーンの奥義が発動されるまでに攻撃は何度か受けた。とは言うものの、受けたのはよくわからない「パワーダウン」であり、実質ダメージは0に等しかった。ソーンの奥義、それは麻痺だ。相手の動きを1分間封じる。その間に、種族不明グラン、大天司長(?)ルシオ、半身半魔アーミラ、ダジャレ王ソーンというメンバーで殴り続けるのである。無言で。ひたすらに。

「また遊べるね！」

あつさり倒れるケルベロス。

「ああ、済みましたか」

ほんとそんな感じ。いやルシオ、お前はスタメンとしてもっと倒した実感を持つべきだ。仮にも星晶獣同士で、だぞ？などとグランがぼんやり考えていると、あつという間に次の戦闘が始まる。次はEXだ。めんどくさがりのプレイヤーなのか、PTの変更はなく、そのままのPTで戦闘が始まる。

「追い詰めるわ」

即死。

「私、やるー！」

「みりやもやるー！フレイフレイー！あはははははー！」

ぼっこぼこと、討伐。

「邪悪なるものよ、去れ！」

心優しいケルベロスは去ってくれる。

「ち、Heelはでねーし泥は泥ってかwははっ」

次の戦闘が始まる。

「追い詰めるわ」

即死。

「私、やるー!」

「みりやもやるー!フレイフレイ!あはははは!」

ぼ(ぼ)こと、討伐。

「邪悪なるものよ、去れ!」

心優しいケルベロスは去ってくれる。

「ち、Heelはでねーし泥は泥ってかwははっ」

以下省略。

「いやあ、エンドレスエイトとは違って、たった4回だからね、コピペしてもいいと思ったんだけど…」

「作者さん、さすがにそれは…」

「でもさ、グラン。君たちがいかに延々と同じ動作を繰り返していたか、読者に伝えたくない?」

「それを言葉で端的に伝えるのが作者の仕事でしょう!この苦しみ!この痛み!いつ終わるか分からない、無限のループ!僕たちはただ操られるままに、敵を倒し続けてきたんだ!何回も!何十回も!何百回も!!」

「…なんかすまん。でもおかげで強くなっただろう」

「あのさ。今回集めた武器、装備してんの?」

「お、落ち着いて?セラバハだから…その…オルタナの代わりに前回作った1本は入れてるけど…」

「こんな頑張って集めた武器を装備してないの!?ねえ!」

「許してくれとは言わないよ」

「当たり前だよ!」

「いやあほんとにすまないね…」

「…もぅいいよ」

「ごめんね…じゃあ、ゼノウオフいこつか」

「それが最期の言葉でいいんだね？」

グランがこんな風に怒るのは本当に珍しい。いつもだったら「僕に任せてください！」とどんな無茶でもやってのけるのに。そこがかっこよかったのに！

「主人公だって…モチベは下がるんだよ…」

確かにそうだ。討滅戦が終わったら、撃滅戦だ。その次は四象降臨。休む暇はない。そして何よりゼノウォフは、非常にめんどろな技を放ってくる敵だ。デバフ全消し、バフ消し、絶命・混乱、単体攻撃全体攻撃…なんでもありなのだ。しかも有利属性となる風属性には、敵からのデバフを防げる「マウント」「アビリティ持ちがいない。ストレスがたまらないわけがなかった。

「よし、分かったよグラン。ゼノウォフはやめよう。代わりに、ゆぐ剣5本、4凸しよう。真理の土を500個と、土エレメントを1000個…あ、今300個あるからあと700個ね。それと、剣のエレメントを——ん？プシケューが全然足りないね」

「行きたくない、と言ったら？」

「あまり強制はしたくないんだけどね。クエストボタン押してオート周回するだけだよ」

「くっ…」

「グラン。空の果てを目指すのだろうか？そのためには、クエストを周回して、ドロップを——」

「そうだ！空の果て——寄り道してる場合じゃない！行かなくちゃ」

…よく考えたらそうじゃない？あれ？ゼノウォフ倒してる場合じゃないよね？依頼受けてる場合じゃないよね？頑張れグラン！私たち騎空士は、君がお父さんに会えるその日を、楽しみにしているよ！

空の世界の愛の物語①

人は愛を求めるものなのよ。大衆受けする物語は、いつでも愛を描いた物語だわ。

「あとはハッピーエンドもね！」

「水着になったリア充さんは大人しく海に沈んでなさい、今忙しいのよ」

「なにより、ルナルルなんて去年水着で海行つて騎士様に見とれてぶっ倒れてるくせに〜」

「そ、それはそれよ。わ、わかったわ。と、とりあえず今宵は神聖なる儀式の刻だから邪魔しないでほしいのよ。水着壊れ部屋にでも行つてベアとゾーイと遊んでいるといいわ」

「そこまで言うなら仕方ないわね。原稿、ちゃんと整理しながら作業するのよ？それと、ハッピーエンド以外は認めないから☆」

「ふふ、任せなさい」

ふう。やつと出て行つてくれたわ。なぜか彼女と私は『物語を独自の解釈するにもかかわらずオタク受け抜群、髪は部屋〜』に入れられているのだけれど、今日だけは邪魔されるわけにはいけないわ。

こほん、話を戻すわ。

えつと。私が言いたかったのは、愛は美しいものということよ。どんな形の愛も、尊いものなの。いいえ、愛に形はない。愛はそこに在って、それだけで素晴らしいの。

例えば、男女の恋愛。例えば、親子愛。もちろん美しいわ。でも、それが愛のすべてではない。男同士でも、女同士でも、そこに愛は存在するわ。いいえ、生物を超えた愛も確かにある。ムツゴウ先生のような動物への愛。もつと言え、無機物——家や、鉛筆にだって愛を注げる。すべてが愛。

そして、愛あるところに、物語はあるの。

この神から見捨てられた空の世界にも、無限に愛は存在する。私はこのグランサイファーに乗ってから、様々な愛を見てきた。

今日はね、その愛の物語を伝える回。

今日は初回だから、優しい愛の話を持ってきたわ。

ふふ、私の大好きな「救国の忠騎士」

あら、誰かしら？「どうせ男同士の恋愛を描きたいだけだろうW乙WW」とか思っちゃった哀れな子羊は。

私が今日紹介する愛の物語は、シルフ様と星の民の物語よ。

こんこん。

「ちっ、封印されし邪眼に射抜かれたいのはどこの骨かしら」

「入ってもいいか」

え、この声井上さんじゃない？井上和彦さんじゃない？ええ？

「いると思っただが…」

「は、はは、はいいいい！います！る、るるるるルナルです！どうされましたかっ！」

「おお、よかった。突然来てすまない。実はな、絵を描いてほしいんだ」

「え、ええ、絵ですね。わわ、わあたしでよければっつ！」

「ふっ、描いてくれるのか。助かる」

「ほめていただきこうへいでしゅ！アガッ」

「大丈夫か？」

ちよつと噛んだだけなのに真剣な顔でめつちや近寄ってくる――

！逆にダメ！やめるのよ！やめてジークフリート様！私の心が溶けてしまうわ。私なんかの心配はいいから！いいのよ！いや…あつ。

ジークフリート様の伸ばした手が私の顔に触れたように気がするけれど、その先のこととはあまり覚えていない。ベットに寝かされていたら、きつとジークフリート様に運ばれたのだろうけど――ああ、想像するだけで天が近づくわ！

シルフ様のお話はまた今度よ。

ふふふ、空の世界の愛の物語、お楽しみに。

星の獣の奏者ジータ 前編

「ええ!? 団内の星晶獣が喧嘩を始めた!」

「はわわ、大変ですう!」

ロゼッタから報告を受け、慌ててグランサイファーを飛び出す。

「ルリア、行くわよ! もう、こんな時に何やってるのよー!」

「ビイさんが『たまには星晶獣にも仕事させた方がいいんじゃないか?』ってかわいい顔して言うから魔物の見回りの依頼を任せたくてすよね…」

「ルリア、説明ありがとう! とにかく今は急ぎましょう」

「えーと、今確か見回りに行っているのは…」

「ルシオさんと、メドゥーサちゃんと、ゾーイさんとケルベロスちゃんと…えーと、」

「あとはノアさんとゆぐゆぐ、モルフエとヴェトルとロゼッタ、最後にビィね」

「はわわ。たくさんいますねー。大丈夫でしょうか」

「大丈夫じゃないから今こうして向かっているんですよ! 本気を出したらどうなることか…あの闇エレメント・リッチさんですら島一つ滅ぼせるのよ!? 街に被害を出してしまったら、私のジータ商事株式会社の未来はないわ!」

ジータは、日ごろから何かあれば即時対応を心掛けている。ロゼッタお姉さんから脳内に直接語りかけられた今回も、即時対応ということで、代表取締役社長自ら駆け付けたわけである。

上限の月がちょうど南中した頃。ジータとルリアは険しい山道を進む。あたりは暗くなり、月明かりを頼りに前に進むしかなかった。

「あつ! あの茨は!」

「間違いないわ。ロゼッタのものよ。いくら町の外れとはいえ、あんなにでかい結界を作って何やってるのよー! 騎空士は信用第一なのよ!」

「ひゃわっ!」

ルリアが石につまずいて転んでしまう。ジータはすぐさま手を差

し伸べる。

「っ！ルリア、大丈夫？」

「いたたた：ジータ、ありがとう。大丈夫です。へへへ」

「くっそ、ほんとこの東山ボイスかわいんだよな、くっそ」

「はわ：？何か言いましたか？」

「いいえ、なんでもないわ。先を急ぎましょう」

ルリアを気にかけてつつも、先を急ぐ。険しい山道を抜け、ようやく茨の結界の入り口となる草原へとたどり着いた。

「ノックすれば開けてくれるかしら」

「えっと：JKっていえば開けてくれるって前にロゼツタさんが言っていました」

「よく覚えてたわね！さすがよ、ルリア」

「えっへん！」

「あー、あー、かわいいよー！」「？」

「そんな瞳で見ないでー！とか言ってる場合じゃなかったわ、ええと：JK」

「あ、入れるようになりました！わーい」

「さあ一体中で何が起きているのか。このあと独占生中継です。チャンネルはこのままでー！」

「中は異様な静けさに包まれていた、ですか？」

「ルリア、台本を読んでいることを隠す努力をなささい」

「はわわ：ごめんなさい」

「いいわ。続き行きましょう」

「星晶獣たちがみな倒れてしまったあとなのかもしれない。不安な気持ち在必死に抑え、ジータは先をと進む」

「ルリア、星晶獣の気配は感じる？」

「：は、はい。ここを左に曲がったところから強い気配を感じます。全員そろっているような：？？」

「全員？：どういふことなのかしら。とにかく、急ぎましょう」

【ぐぬぬ、疲れてるときに：】【まだ何も見えてこねーな！】↓s k i

p

黄紅石を2個手に入れた！キュアポーションを1個手に入れた！

「あれは…?」

「茨の中にまた茨…怪しさしかないじゃない」

「え、えつと、入りますか?」

「もちろんよ。JK」

そこでジータたちが見たものは…

〈後編へ続く〉

星の獣の奏者ジータ 後編

「いえ〜い！ドツキり成功ね！」

「ぎやははは、お前もルリアもすげーびっくりした顔してるぜ。こんな顔オイラも見たことねえよ」

「我々の余興はいかがでしたか」

「ふっふーん！私のおかげね（お尻ふりふり）」

「仕事と余暇の均衡が崩れる時、我は顕現する」

「アホ面してるわん！面白いわん！ふふふ、大成功ね！」

「ごめんよ、団長さん。だますようなことをして…。ラカムにも心配かけちゃったかな」

「——♪」

「姉さん、こんなこととしてよかったのー？」

「たまには必要よ」

ジータは改めてにやにやしている星晶獣たちを見渡す。その視界は、すでに歪んでいた。

「ルリア。もうこいつら吸収してしまつて。あ、デウス・エクス・マキュラ・マリウスだっけ？なんかあれで抹消してもいいわ」

「管理者権限を譲渡——」

「おいおい、ジータもルリアもそこまで怒ることねーだろ…」

「あるわよ！あほ！ばか！どれだけ心配したと思ってるの…！もう…っぐ。ひっく。…うえ〜ん！」

「あー。すみません。人の心は難しいものですね。企画したビィさん、メドゥーサさん、あとはお任せしますよ」

「つておい！無責任すぎるだよよ」

「そうよ！私が間違つてたつて言うのかしら？ふんっだ！」

「ごめんね、団長さん。安心して、僕たちは誰も喧嘩していないから…」

「くっそう！ノアのやつ、ちゃっかりイケメンポジション入りやがっ

てよう！」

「あらあら。そんなんだからビー畜とか呼ばれるんじゃないかしら」

「ぐぬぬ…話は魔物を蹴散らしてからだぜ！」

「――？」

「ほら、ユグドラシルも話をごまかさないうて言ってるわ」

「これだけの人数がいるのだから、もういばらの中はどったんばったん大騒ぎだ。」

「姉さん、僕たち星晶獣の中だと力も影も薄いね」

「…眠いから寝ようかしら…」

「姉さん、ダメだよ！」

本格的に喧嘩が始まりかけた時、ルリアのお腹が盛大に鳴った。

「はわわ！これはその…」

「あら、ちようどいいわ。ほら、ケルベロスちゃん、ゾーイちゃん、あれを準備してくれないかしら。ユグドラシルも、お手伝いお願いね」

3人(?)は無言でうなずくと、後方へと走り去っていった。

「ごめんなさいね、団長さん。ルリア。本当は私たち、サプライズをしたかっただけなの。ちよつと刺激が強すぎたわね…」

「わ、私だって喜んでほしくて必死に『人間 驚く 方法』で検索してたんだからね！わざとじゃないんだから」

「すまねえな、まさか泣かせてしまうとは思わなかったぜ…オイラからも謝るぜ…ごめんな」

「…分かってるわよ、みんながサプライズしたかっただけっているのは。最近サプチケ来ないし。ここにいるみんなはサプチケで交換不可な子が多いし。…でも、もつと他にやり方があるじゃない…」

「最初は簡単なものにしてしようとしていたんだけど…ビー君に話してる所をメドウーサちゃんに聞かれちゃって…」

「あー。それで…」

「なによ！私が悪いみたいじゃない！」

「メドウ子、違うのよ。私は、メドウ子がみんなで盛り上げようとしてくれたって、分かってるから…」

「わ、分かってればいいのよ」

「うげえ、めんどくせーやつ…」

「ビイ畜、なんか言ったかしら」

「んな！何も言ってるねえぜ！」

「おや。そろそろ戻ってくる頃でしょうか」

3人は給仕服姿で戻ってくる。ケルベロスはピザをもって。

「熱いわん！」

「ミトンじゃないわん！」

ゾーイはきれいに並べられた食器類をもって。ユグドラシルは、力を使って木のテーブルと椅子を用意した。

その場に残っていたルシオやモルフエたちが打ち合わせ通りに準備を進める。あつという間に、茨に包まれたパーティー会場へと様変わりした。

「はわわ、おいしそうです！」

「私が作ったんだからおいしいに決まってるわ！」

「た、食べ物で釣ろうだなんて…私はそんなに単純じゃないわよ？」

と威勢を張るも、ジータのお腹は豪快な音を立てた。

「さ、食べましょう。早くしないと冷たくなってしまおうわ」

「オイラたち星晶獣もジータとルリアにはほんとに世話になってるからな。改めて礼をしたかったんだぜ。えへへ」

「なんでビイが星晶獣面してるのか分からないけれど、本当にうれしいわ…」

「我々も苦労したのですよ。人間が何を好むか分からないので」

「姉さん、今クライマックスなんだから食べながら寝落ちしないでよ…」

「熱かったわん！許さないわん！」

「あははは、おもしろーい！」

「それにしても、ほんとにおいしいね。ラカムにも食べさせてあげたかったよ。ああそうだ。後で届けてあげよう。ふふふ、喜んでくれるかな」

思い思いに星晶獣と人の子はパーティーを楽しむ。

ジータは思い返していた。これまでの旅を。そして考えていた。

これからの旅を。でも、まずは。

「そうね、まずは魔物の見回りをしっかりしてもらって、報酬をいただいた上で星晶獣のみなさんには当分夕飯なしの刑かしらね」

「うげえ。やめてくれようう」

「満腹と空腹の均衡が崩れる可能性が生まれた時、我は顕現する」

茨で外は見えないが、月はすでに弧を描いてゆつくりと沈んでいた。

まだ宴の終わりは遠い。だが、千年を生きる星の獣にとっては刹那に過ぎない。

それでも、ここにいる獣たちは誰もがこの日のことを忘れない。千年を経ても、二千年を経ても。その身が滅びようとも。

風に揺れる木々のさざめきが、とても気持ちの良い夜だった。

ぐらんフレンズくみなみさんにお任せなのだく 前編

事件は朱雀を倒している時に起こったのだ！あれはもう大変だったのだ。

聞いてほしいのだく！オクトー！

「またやってしまったのか、みなみさん」

確かに中の人高山みなみだけど私はサラサなのだあ！それどころではないのだー！

「はいよー。とりあえず話してごらんなさい」

水パのみんながサンドスターに当たってしまったのだ！

「ほう…それでそれで？」

だから、みんなフレンズ化してしまったのだあ。

「ところでみなみさんはサンドスターに当たったの？」

「え？」

やってしまったのだあー!!!

「コール・オブ・アビス！」

「偃月の陣！」

「るん♪るん♪りるるん♪」うおー、はい！うおー、はい！

「アイルビィバック！」

「え…？そんなだったっけ？」

「坊主、細けえこたあ気にしちや負けだぜ。フルメタルⅡトランスフォーム！」

水パはいろんなメンバーの組み合わせが見れて楽しいのだ！

「カトルは…いないんだね…」

その時私はエッセルと一緒に後方から応援していたのだ。何かあったら飛び出していくのだ！

「二度とその面を見せるんじゃないやねえ」

終わったみたいなのだ。次は何が始まるのだ？

「遺言はあるか？」

さつき二度とその面を見せるなって言ってたのだ〜！また朱雀と戦っているのだ！

ん？あれ？あれはなんなのだ？もしかして…サンドスターが降ってきてるのだ！

「火山が近いから…噴火したのかもね」

逃げるのだ。みんな逃げるのだ〜！

「サラサ、すまない。撤退はできないよ。僕はプロの演奏家だからおかしなのだ！エリユシオンは死後の楽園のことってwikiに書いてあったのだ！演奏家じゃないのだ〜！というかなんかそこじゃない気がするのだ〜！

「私たちだけでも逃げよう。大丈夫、彼らは強いよ」

でも…

でも、逃げ場なんてなかったのだ。後方に下がったその時にエッセルがフレンズ化してしまったのだ。

「エッセル・スーオーカップ〜！」

ど、どうしてしまったのだ？

前を向けばみんなもフレンズ化しているのだ。魔物も…え!?朱雀もフレンズ化しているのだ。見てしまったのだ！

「わたしはさすが〜！溶岩の中で食べるじゃぱりまんは〜おいしい〜！」

「…それで慌ててここへ来たぞ」

そうなのだ！

「話は聞かせてもらったぞ」

「…ここは私たちの出番のようね」

2人は…プリ〇ユア!?

「どこ見たらそう思うのよ〜！」

バザラブ（別名バザラガ）とゼタなのだ！十天衆よりも組織の方が役に立ちそうなのだ！

「…くしゅん！あつれ〜」

どこかでシエテのくしゃみが聞こえた気もするけど気にしないのだ。ところで組織の2人は何をしてくれるのだ？

「助けていんだろう…彼らを」

「そうなのだ！」

「だったら私たちに任せなさい。フレンズ化を解除するには1度サンドスターの力を打ち消す必要があるわ。この武器を使えば…」

「少々しゃべりすぎだ。行くぞ」

「あ、ちよつと！待ちなさいよ！」

みなみさんも行くのだー！みなみさんにお任せなのだー！

「確かにどんな事件でも真実は1つだもんねー、解決してくれそう」

ぐらんフレンズくみなみさんにお任せなのだく 後編

「すつごい和んでるんだけど」

「：酒を用意するか」

「あんた仕事でしょ！しっかりしなさいよ」

「おお！ゼタとバザラブさんとみなみさんだ！こつちおいだよ」

グランはあんまり変わってないのだ。

「すつごーい！おいしいラーメン知ってるのね！わーい」

リルルもあんまり変わってなさそうなのだ。

「あら。新しいお客さんね。自己紹介するわ。わだくぢばくすぎあああぐー！」

朱雀やめてくれなのだ！ぶつつぶす！

「グラゼロはだめよ。あはは、それにしても珍しい角だね、あはは！」

エツセル：なんか怖いのだ。

「こうどなじょうほうせんだね！ぼくもまぜてー！あ、ねーねー！このほんなんてかいてあるのー？」

アルマイル!?誰なのだ？お前誰なのだ？

「あなたには言われたくないもーいもん！」

うわああアルマイルー！なにか違うフレンズ化してしまったのだ…。

ゼタ、バザラガ、はやくなんとかしてなのだ…

「え、えへへ…。バザラガは、お、おもしろいですよね…」

「ゼタちゃんマジで？ちよつとしゃべりすぎっちゃた的な？ウエーイ！」

え？え？なのだ。

フレンズ化って結局何？人がフレンズ化すると…何なのだー！うーん。難しいことはわかんないや！なのだ。

みんな、グランサイファーに戻ろうよ！

「いいねー。おうちいきたーい！」

みんなー、しゃべるとき自己紹介してほしいのだ！

アルタイル「いいこー！ぼくのおへや、すっごいんだよ！」

グラン「ぼくの部屋も負けてないよ！」

リルル「るんるん（*´ω`*）」

エツセル「あはははは、たつのしー！いこうぜ」

もういやなのだ…。

ナルメア「おかえりくだいじょうぶ？おねえさん心配してたよ？」

緒にグラブルしよつか！

シエテ「おお、おかえり団長ちゃん！へへへ狩りごっこしよつか」

この2人は大丈夫そうなのだ…？

ラカム「おいおい…みんなどうしつちまつたんだ？なんか、ふいきき？ふんんいきき？がちがうみたいだけど…あはは、へーきへーき、のけものはいねえもんな！」

難しいことはわからないのだ…。でも、あつちはもろにフレンズ化の影響を…いや、野生解放しているのだ。

カタリナ「ビィくううん！ビィくん！ヴィィくううん！」

ウイル「はあ美しいその瞳…ああ…なんてすばらしい爪なんだ…」

ビィ「オイラは人間だぞ！やめろっ、さわるな、ゲスが！」

空の青さを見つめっていると、心が――。

ラカム「なあみなみさん。どうしてそんなに落ち込んでいるんだい？」

だつてラカム…全空の危機なのだ！平和を守るのだ！

ラカム「そうかあ？みんな楽しそうじゃねーか」

そう言われるとそうなのだ…あれ…。

ラカム「だろ？じゃあそれでいいんだよ！な、遊ぼうぜ！」

そんな気がしてきたのだ！遊ぶのだ！

グラン「そろそろ次の島いこーぜ！」

私たちの旅はまだまだ続くのだ！楽しみにしてるのだ！

※島を出るとフレンズ化が解除されてしまうぞ！その後四象思い

出してガンガン走ったのはまた別の話。